身体運動がイメージに及ぼす影響
—擬態語文字情報を刺激として—

金沢大学　吉川京子

Ⅰ．目的

教育課程審議会の答申を受けて，新しい学習指導要領が平成10年12月に告示され，小中学校では平成14年度から全面実施される。今回の改訂では，心と体を一体としてとらえることが重要視された。そこで，身体運動を経験することは，イメージ想起にどのような影響を及ぼすのかを探ることは，教育現場における身体表現活動の重要性を問うのに必要であろう。

本研究では，擬態語文字情報を刺激として，動かずにイメージを想起する場合と，動きながらイメージを想起する場合では，イメージがどのように異なるのかを明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．方法

1．対象：小学校３年生（男子17，女子16）計33名

2．刺激の設定

現行の学習指導要領第３・４学年の表現運動の内容から，「軽い柔らかい感じ」を取り上げ，「擬音語・擬態語辞典」を基に，擬態語「ふわふわ」を選択した。イメージ及び動きが多様化するように，柴らの研究[1]を参考に４つの型「ふわふわ」「ふわんふわん」「ふわーん」「ふわ～ん」の擬態語文字情報を同時に提示することとした。

3．実験期日：平成11年10月27日～11月９日

4．実験方法

実験は個人毎に行った。一人について，「軽い柔らかい感じ」の擬態語文字情報について，「動かずにイメージする場合」と「動きながらイメージする場合」の計２回の実験を行った。１回目の実験の影響を避けるため，2回目は，期日をおいて実施した。また，「動かずにイメージする場合」と，「動きながらイメージする場合」の順序性を排除するため，実験の順序はランダムとした。

１）動かずにイメージする場合

擬態語文字情報刺激を児童に示し，「思い浮かぶこと，感じることをことばや絵でできるだけたくさん書いてみよう。」と書かれた用紙に，刺激から想起されるイメージを自由記述してもらった。

２）動きながらイメージする場合

擬態語文字情報刺激を児童に示し，刺激から感じるままに動いてもらい，「どんな感じ？何が思い浮かぶかな？」と児童に実験者が尋ね，児童が想起したイメージを実験者が記録した。「他の動きもできるかな？」「どんな感じ？何が思い浮かぶかな？」と続けた。

5．分析方法

「動かずにイメージした場合」と「動きながらイメージした場合」のイメージをＫＪ法により分類した。イメージについては，一単語で表現されたイメージと複数の単語から構成されたイメージが見られた。そこで，後者については，複合イメージとし，イメージの中心と考えられる単語によりイメージ分類を行った。さらに，複合イメージに関しては，イメージの中心と考えられる単語を修飾している単語についてもＫＪ法により分類した。動かずにイメージした場合と動きながらイメージした場合の，イメージ数，複合イメージ数，イメージの種類数の比較にはｔ－検定を用いた。

Ⅲ．結果及び考察

１人当たりのイメージ数は，動きながらイメージした場合は4.5個，動かずにイメージした場合は５個であり，有意差は認められなかった。

１人当たりのイメージの種類数は，動きながらイメージした場合は2.7個，動かずにイメージした場合は3.2個であり，有意差（$p<0.05$）が認められ，動かないでイメージした方がイメージの種類数は多いと言えた。１人当たりの複合イメージ数は，動きながらイメージした場合は1.5個，動かずにイメージした場合は0.5個であり，有意差が認められた。また，イメージ総数に対する複合イメージの割合も，動きながらイメージした場合は33.6%，動かずにイメージした場合は10.9%と有意差が認められた。従って，動きながらイメージした方が，複合イメージ数が多く，複合イメージが全体に占める割合も高いと言えた。複合イメージを想起した児童の割合は，動かないでイメージした場合は28.1%，動きながらイメージした場合は50%であり，有意差が認められ，動きながらイメージした方が，多くの児童が複合イメージを想起すると言えた。

以上より，身体運動を伴ったイメージ想起は，身体運動を伴わないイメージ想起に比べ，イメージが多様化するというよりも，むしろイメージが深化すると考えられた。

イメージ総数に対する「動きのあるもの」のイメージの割合は，動きながらイメージした場合の方が多い傾向がみられた。また「動きのあるもの」の中でも，「運動」に関するイメージが，動きながらイメージした場合に多い傾向がみられた。更に，イメージを修飾している語についても，動きながらイメージする場合の方が数が多く，（浮いている，吹いている，飛ばされている等）動かずにイメージした場合には見られないような「動き」に関わるイメージが多く出現した。身体運動を伴ったイメージ想起は，身体感覚を通したイメージの内在化に繋がったと考えられ，心と体の一体化のプロセスとしての活用が期待される。

注1）「擬音語・擬態語と動き及びイメージの関係について」体育科教育学研究15-1.1998